

2012年3月会員例会 講演録



日時 平成24年3月15日 (木)

場所 岐阜グランドホテル

講師 拓殖大学学長

渡辺 利夫 氏

テーマ／『迷走する日本外交』

講師プロフィール

1939年山梨県出身。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程。経済学博士。80年筑波大学教授、88年東京工業大学教授。2000年拓殖大学国際開発学部学部長、04年同大学院国際協力学研究科委員長、05年同大学長就任。現職。

[主な著書]

『成長のアジア停滞のアジア』東洋経済新報社・吉野作造賞・1985年、『開発経済学』日本評論社・大平正芳記念賞・1986年、『西太平洋の時代』文藝春秋・アジア太平洋賞大賞・1989年、『神経症の時代』TBSブリタニカ・開高健賞正賞・1996年、『君、國を捨てるなかれ』海竜社・2010年、ほか多数。

要旨

第二次世界大戦という大変な悲劇に至る分水嶺となったのが、イギリスがヒトラーへ妥協した、ドイツへズデーデン地方を割譲するミュンヘン会談であった。尖閣諸島の中国漁船衝突事件に対する日本の対応は、主権侵犯という犯罪に、一切の法的措置を取ることが出来なかった。外交の抗議活動を厳然とやらなければ、国家とは言えず、尖閣諸島に対する主権を主張できない。そういう日本はミュンヘン会談を中国との間でやってしまった。日本を変えていくためには、まずそういう事実に対する自己認識、事実認識を持つことが重要である。

皆様こんにちは。ご紹介頂きました渡辺でございます。岐阜県の経済同友会からお招きを賜りまして大変光栄に存じます。今日話をここですということになりましたら、どういう筋からか古田知事の方に話が伝わったらしく、外務省時代からの旧友でございますが「久しぶりに会おうか」ということで、何と講演にまで出てきて下さるということになり、本当にありがとうございます。今日はご案内のようなテーマで80分という少々長丁場ですがお話してみたいと思います。

現在の日本を取り巻いている極東アジアの外交環境は、非常に緊迫しているように私には思えます。それでもなお、わが執権政党のリーダーはこの段階になっても、尖閣における中国漁船の衝突事件などという明らかな主権侵犯事件が起こってもなお、日米中正三角形論などということをもまだ言っている人がいて、どういうことかという感じを私は強く持っております。申すまでもなく日米は同盟関係にある一方、日中は克服困難な懸案を、たくさん持っている関係です。この日米中が等距離の正三角形にあるなんて話はありませんと思うのですが、しかし与党の指導者は依然としてそんなスタンスです。

中国の経済、ご承知のように大変な勢いで今なお膨張を続けております。豊かな財源をもって軍拡路線を続けています。私の同僚、中国

の軍事力のハードウェアを研究している防衛研究所 OB の大変優れた先生は、台湾から東南アジアの方に広がっている南シナ海の制海権は、どうやら中国が握ってしまったようだと言及をしております。

それから台湾から渤海、黄海、朝鮮海峡、朝鮮を経て九州に至るあの辺り、これは東シナ海と言いますね、日中中間線問題で日中が緊張している地域、尖閣もそこにある地域ですけれども、ここはまだ中国が掌握したというほどではない。しかし国産空母の建造に中国は既に着手したという情報がありますね。その空母に載せる爆撃機については重慶で生産が開始されたという報道があります。複数隻の航空母艦が東シナ海に遊弋(ゆうよく)するということになれば、その制海権も中国の手に落ちることになりましょう。南シナ海と東シナ海の二つの海が中国の手に落ちれば、その真ん中にある台湾はもう熟柿が落ちるごとく、中国のものになってしまいます。そうなれば中国による東アジアの制海権の掌握が成功し、さらに広いアジア太平洋において米中の覇権争奪の時代がいずれやってくる可能性は大です。

中国とどう向き合うかは、21世紀の日本の命運を占うような巨大なテーマではないかと思ひます。もしそうであれば、私共はそもそも中国というのはいどういふ存在なのかということを知解する必要があるだろうと思ひのです。中国のような長大な歴史を持った国家であれば、その存在が何であるかを見る為には、やはり歴史的な観点が必要なのではないかと私はい思ひのです。歴史の中に織り込まれてきた中国の民族的遺伝子はいどんなものなのかということを知、これは極めて難しい問題ではありますがい、考へてみる必要があるのではないかと思ひのです。

中華人民共和國とはいいかなる存在かという問いに何とか答えを見出そうと思ひて、今日は多少の野心を持ってやって参りました。このようにことを人前で話すのは初めてで上手く話がまとまるかどうかちょっと自信がないのですが、やってみたいと思ひます。

レジュメ 2枚と図表が 1枚、合計 3枚がお手元についておりますがい、それに目を落としながら話を聞いて頂くと有り難く存じます。中華人

民共和国とはいかなる存在かと問われた場合、私は次の二つの答えをしようと考えています。その第一は「中華人民共和国とは、大清帝国の後裔である」です。第二は「中華人民共和国とは後れてやってきた帝国主義国である」と答えようと思います。今日はこの二つについて私がどうしてそのように考えるかをお伝えして、日本が中国とどう向き合ったらいいのかについてのヒントが得られればと考えている次第であります。

まず「中華人民共和国とは大清帝国の後裔である」という点についてであります。この点は多少歴史的な話を言わなければなりませんので、少々退屈かもしれませんが、中国とは何者かを捉える為には、どうしても聞いて頂きたいことでございます。

私は常々日本史の常識によって中国史を見ては認識を誤ると考えております。日本という国は四方を海に囲まれて、古来外敵の侵入を受けることがなかったですよ。そして同一の人種が同一の国土の上で長い歴史を紡いできた訳です。ですから日本の歴史は中学校の歴史教科書が教えるような時代的な順序を踏んで段々発展してきたのだらうと思います。縄文・弥生時代があり、古代律令国家の時代があり、鎌倉・室町という武家支配の時代があり、それから戦国時代を経て江戸時代という近世社会が生まれ、それが終わって明治維新が成功して……という風に、日本人が了解している歴史的な発展、縦の発展があったと考えて大体間違いがないだらうと思うんですね。そうやって刷り込まれたこの歴史感覚をもって中国史を見ると、中国の歴史はまるで分からないんじゃないかなと思うのです。日本史の感覚からは及びもつかないような、茫漠たる世界が中国だと言った方がいいように感じます。

中国はユーラシア大陸の巨大国家です。周辺を極めて多くの異民族に囲まれております。そして異民族による支配を余儀なくされたことも、中国には度々あったのです。皆さんもモンゴル族によって中国が征服されて元という王朝ができたという話は、ご存知のはずです。あ

るいは一つ王朝が飛びますけれども満州族が長城を越えて、漢族を征服してできた王朝が清という王朝であったということも皆さんよくご存知であろうと思います。現代に近い二つの王朝について申し上げただけですが、中国史は周辺の異民族と漢民族との対抗の歴史としてこれを描くこともできるほどであります。まるで日本とは違うのです。

今、元王朝と清王朝のことを話しましたがけれども、その二つに挟まれていたのが明という王朝です。明王朝は、モンゴル族によって征服されて生まれた元を追い払って、つまりモンゴル族をモンゴルに追いやってできた漢民族の王朝です。当時ナショナリズムなどという観念はこの世の中には存在しなかったのですけれども、分かり易く話をする為にあえてナショナリズムという言葉を使いますと、明王朝は漢民族のナショナリズムの極めて強い時代であったということが出来ます。

その為でありましょうけれども、明王朝は中国の王朝史の中で伝統的な華夷(かい)秩序の観念において非常に強い王朝でした。華夷秩序は、伝統中国を理解するのに、そして今日の中国を理解するのに、どうしても欠かすことのできない観念です。とかく私共は中華思想という言葉をよく使いますがけれども、意味するところはそんなに遠くはありません。ただ中華と異族との価値の上下関係を示すという意味では、中華思想というよりは、華夷秩序と言った方がより適切であろうと思います。学会でもこちらの用語法が定着しています。

図 1 を見て頂きたい。明朝において典型的に表われた華夷秩序というのは、どういう秩序であったかが図 1 に示されています。中国の伝統的な思想は申すまでもなく儒教あるいは儒学です。儒学において道徳的規範の中心にあるのは礼という概念です。この礼という道徳的規範の観念において最も高いところに位置するのが、真ん中に書いてある中華です。そしてこの中華から同心円的に広がって行って、外縁に行けば行くほど文明度において劣るというそういう価値観念、これが華夷秩序です。

価値の序列観念が伝統中国にはあり、特に明王朝においては、これ

が大変強いものであったということです。中華の下にカッコして中原と書いておりますけれども、これは地域の名前です。黄河の中流域、今の省の名前で言うと河南省辺りが中心になって広がっている華北平原が中原と言われ、ここが中華の中心であった訳です。この中原を制した権力者が、中国の王朝の皇帝になっていくというストーリーが作られています。皆さんも「中原に鹿を追う」とか「中原に覇を競う」という言葉をどこかで聞いたことがおありなのではないかと思えます。河南省を中心とした現在の華北平原辺りが中華であり、そこから同心円的に広がって外縁に至れば至るほど文明の度合いが低くなる。そういう価値の序列観念を中国の王朝は伝統的に持ってきたのです。

この中原の周りには多様な漢民族の社会があります。この漢族社会の一番外縁に住まっているのは異民族でして、顔は人間の顔をしているけれどほとんど人間ではない。文明の度合いにおいて圧倒的に劣る民族という訳ですね。東夷(とうい)・西戎(せいじゅう)・北狄(ほくてき)・南蛮(なんばん)です。夷も狄も戎も蛮も、辞書で引いてみますと大体同じような意味です。文明の中心から遙か隔たった未開で野蛮なところだという意味です。この観念を理解しておくことが非常に重要です。現代の中国においても、この華夷秩序の観念が、国力と軍事力の増強、政治世界におけるプレゼンスの増大に伴って、実は覚醒しつつあるという話を後で申し上げようと思えます。

しかし、他面もあります。つまり中華の外方には夷狄がいて、これは蔑視の対象である。漢民族はこの周辺異民族と対抗するだけの関係がずっと続いてきたかということ、そうとばかりは言えません。そういう一面もありますけれども、対抗ばかりしていた訳ではない。高い文明の中華がこの礼を知らない非文明的な夷狄に対して、礼という道德的規範を教え諭す。そして周辺異民族も中華の皇帝を慕ってその教えに感化されるということになれば、夷狄も中華の一員として迎え入れられる。そういう開放的な観念も伝統的な中国にはありました。その観念を冊封(さくほう)体制と言います。冊というのは文書のことを

言うんですけれども、冊書(さくしょ)とも言います。夷狄が中華の礼を守り、中華の皇帝と君臣の関係、君主と臣民の関係を結ぶという約束文書が冊書です。この冊書を取り交わして成立した中華と夷狄との関係秩序が冊封体制です。

冊封関係を結んだ周辺異民族の支配者(王)は、まさに中華の皇帝とそういう冊書の間を取り結んだのですから、中華の権威を背に強い支配力を振るうことができる訳ですね。自分の住んでいる地域の土地と人民を支配し易くなる。中華の権威を笠に着て、支配し易くなるということが言える訳であります。周辺の王はそれぞれの地域の貴重な物産を持って中国の皇帝に献上する。これが朝貢です。その見返りに中華の皇帝はそれぞれの周辺の異民族の支配者に王号を与えたのです。

まとめて言いますと漢族の王朝である明王朝、この王朝に典型的に現れた伝統中国の国際秩序観念、その一つが華夷体系であるということです。道徳的規範を持つ文明的世界と、そういう規範を持たない非文明的世界の二つに分けられる。そういう二元論的なものの見方、価値の上下関係、これを伝統中国は色濃く持っているということです。しかし他方には文明圏たる中華が非文明圏たる夷狄に礼という道徳的規範を教え込んで、異民族の方も中華の言う通りだという風に立ち居振る舞うならば、異民族も中華の一員として迎え入れられる、こういう開放的な側面、冊封体制ですね、この二つがあるということです。

ちょっと横道に逸れますけれども、例外はなくはありません。モンゴルですね。これはご承知のようにユーラシア大陸のほぼ全域を征服するくらいの強力な軍勢を張った民族です。明王朝にとってもモンゴルの圧力は、もう日々感じて生活をしなきゃならないほど強いものだった訳ですね。この図の上の方に城のマークが書いてあるのは万里の長城です。万里の長城の歴史は紀元前から始まっていたのですが、明朝に至るまではほとんど土塁だったんですね。ところが明朝に至って皆様も観光で北京の北方に万里の長城を見に行ったことがあると思

いますが、あのような堅固な構造物になったのは、この明朝においてであります。モンゴルは一つ例外的な存在であったとも言いうることができると思います。

さて、中華人民共和国は大清帝国の後裔です。この大清帝国こそが現代に繋がる非常に重要な王朝でありますから、その話に移していきたいと思えます。この清王朝を樹立したのは満州族ですね。北方の遊牧民族。日本が満州国を建国した所ですね。今の東北部つまり遼寧省とか吉林省、黒竜江省、この辺りが満州です。そこに住んでいた種族が満州族、或いは女真族と言われていたものであります。漢族の王朝である明王朝が満州族によって征服されてできた王朝で清王朝です。清王朝は満州族と漢族とのいわば連合政権として出来上がった大変に強力な王朝です。この時代に初めて、モンゴル、チベット、それから新疆ウイグルを含む巨大な地域はまさにこの時代に生まれたものです。満州族によって征服された漢族と満州族との連合政権によって併合された地域がモンゴルであり、チベットであり、新疆ウイグルであるということです。

この時期、モンゴル、チベット、ウイグルを含んだ中国が、中国の王朝史の中でも最大の版図を築いた時期であります。地図帳で調べてみると非常に面白いんですが、実は大清帝国という新王朝は明王朝の三倍の面積を持っているんですね。中国が一挙に大きな存在になったのはこの清王朝においてです。モンゴル族もウイグル族もチベット族はもう漢族とは漢民族とは人種が違いますし、宗教も違いますし、言語も全然違う。もちろん風俗も習慣も全く違います。ウイグル族に至っては、東トルキスタンと言われた地域でありますから、トルコ系のイスラム教徒が住んでいた地域でして、これが漢民族とそう簡単に調和的に並存できるはずもないのであります。しかしそういう難事をやりこなすだけの力を清王朝は持っていたということになります。

清王朝を征服したのが満州族であり、その二つの連合政権下で多様な異民族が中国の中に包摂されていった。もう茫洋たる王朝だという

感じがしませんでしょうか。私も一生懸命分かり易く話しているつもりなのですが、いくら分かり易く話そうとしてもこの程度以上に分かり易く話すことはできない。つまり日本史の常識から中国を見ても到底分かるはずはない。もう感覚が全然違うということです。

この大清帝国は中華帝国と呼ばれているんですね。なぜ満州族が漢民族を征服してできた王朝が中華帝国なのか。この辺りがもう既に我々には分かりにくい訳です。一言で言いますと征服された王朝、つまり漢族の明ですね、これは文明の熟度の非常に高い王朝でした。そこに文明の熟度の低い満州族が出て行ってこれを征服した。そして連合政権ができたという訳で、結局のところ満州族は漢族を征服はしたけれども、漢字を使う、あるいは儒学を学ぶ、それから中国の伝統的な官僚登用試験に科挙試験というのがありますね、ああいった制度を導入する等々、その他にもいろいろありますけれども、満州族が結局は漢族の中に同化されていった。そして中華であることを自らの誇りにもするようになったのでして、大清帝国は征服王朝でありながら中華帝国であった。こういうことができるのです。くどいようですが、もう一度言いますと、要するに漢族と満州族との政治的な妥協によって成立したものが清王朝だった。そしてこの強力な満州族、漢族連合のもとでモンゴルやチベットやウイグルが中華の中に組み込まれていったという訳です。それが故に清王朝は大清帝国、エンパイアと呼ばれる存在になったのです。くどいようですが日本人にはどうしても理解しにくい存在です。中華人民共和国がこの最大の版図である大清帝国を継承した訳ですから、中華人民共和国が我々日本人にとって非常に分かりにくい存在だというのは、考えてみれば当然です。

もう少しこのことについてお話したいのですがけれども、モンゴル族もチベット族もウイグル族も、大清帝国の完全な支配下に置かれた訳ではありません。先程、冊封体制ということでお話した通りです。大清帝国には組み込まれたけれども、チベット、ウイグル、モンゴルはその人種や宗教や言語、風俗、習慣は、旧来のものをそのまま維持す

ることを許されていたのです。そして中華の皇帝から冊書を受け取ることによってその土地の支配と、土地の上に住んでいる人間を統治する。中華の権威を背後に安定的政治を営むことができたという次第です。両者はそれ程の厳しい拮抗関係にあった訳ではありません。この辺が中華のおもしろいところですよ。

実は康熙帝(こうきてい)とか、雍正帝(ようせいてい)とか、乾隆帝(けんりゅうてい)とか、清国の大皇帝の名前はどこかで耳にされたことがあるのではないかと思うんですけれども、こういう人たちは実はチベット仏教の信奉者なのですね。かつまたイスラム教の保護者を任じてもいたのです。いよいよ何のことだか日本人には分かりにくい。分かりにくいけども、そういう茫々たる存在が中国の王朝であったということでもあります。この大清帝国の国際秩序を示したのが、図 2 です。これをちょっと見て頂きたいと思います。

図 2 は大清帝国の国際的な秩序観念を、一生懸命分かり易くと思ったんですが、結局はこんな複雑になってしまいました。真ん中に中華、つまり中原があるというのは明国と同じ構図です。ただこの清王朝は満州族によって征服された王朝ですから、今言う東北三省はまさに満州族発祥の地、つまりは大清帝国が発祥した地域ですから、これは特別行政区域として、ほぼ中華と同じような扱いを受けていました。実際のところ、清国の末期に至るまで、漢民族は、この満州への入植を禁じられていたのです。

さてこの満族と中華を含んだ周りには、もちろん多様な漢族社会です。そしてその一部にモンゴルとウイグルとチベットの三族が併合されていたのです。そして彼らは漢族との間に、君臣の関係を結んでいたのです。これ程の巨大な帝国になれば版図の隅々までを、武力によって隈なく統治するということは普通出来ませんよね。やっぱり中央から遠方にある民族については「そこで自治をやってくれ」ということになります。そして緩やかな連合を作らざるを得ない。これは人間の知恵だろうと思うんです。ローマ帝国がそうであったよ

うに、塩野七生さんの『ローマ人の物語』を読むと、やはり分治とい
いますか、分けて統治するというやり方はローマ帝国でも同じであっ
たようです。現代のバージョンで言えばアメリカがそうであり、イン
ドがそうであるように、ですね。

現在の中国の地図を見ると、モンゴルはモンゴル自治区と書いてあ
りますね。ウイグルは新疆ウイグル自治区と書いてありますよね。チ
ベットはチベット自治区と書いてあります。これはこの時代の名残な
んでしょうね。現実にご承知のように自治区でも何でもありません。
現在の共産中国においては、これは軍事的恫喝の対象であり、言語を
否定され、それから漢族がどんどん移住して行って、それぞれの地域
のマジョリティーになるという暴力的支配の対象になっておりますけ
れども、大清帝国の時代においては、この地域は中華とそれほど対抗
関係にあった訳でもない。地位においてそんなに低いものでもなかつ
たということは理解しておく必要があるだろうと思います。

さて漢族社会の外方にあるのが、朝鮮と琉球とベトナムとネパール
という外国であります。特に重要なのは朝鮮とベトナムです。朝鮮と
ベトナムというのは、当時、大清帝国の皇帝と君臣の関係を結んでい
た、さっきの言葉で言うと冊封国でした。そしてそれぞれベトナムや
朝鮮の貴重な産品を中華の皇帝に献上するという朝貢国でもあった。
その見返りに朝鮮、ベトナムの支配者は中華から王号を与えられて、
その土地と人民の支配を委ねられるという関係にあったのです。

つまり朝鮮とベトナムは中国の朝貢国であり冊封国であった。ネパ
ールも同様です。東南アジアのシャム、タイ、それからビルマ、ミヤ
ンマー、フィリピンなども同様でした。皆様知識を持っておられるか
もしれませんが、琉球、今の沖縄ですが、これもまた、かの時代
にありましては大清帝国の朝貢国であり冊封国でもあった。明治の中
期に琉球処分があって、島津藩がここを直轄の地としますけども、そ
れまでは琉球は、いわば日清両属であった。特に清国の皇帝へのロイ
ヤリティーと言いますか忠誠心の強い地であったということは、知識

として知っておく必要があると思います。

琉球のお城に行きますと守礼門というのがありますけども、これは非常にシンボリックな門ですね。中華の礼を守る門だという意味だと私は解釈しておりますけれども、今の沖縄と本土との関係を考える面でも、こういう伝統は理解しておいていいだろう。本土日本よりも琉球というのは中国と親和的な地域であったということは、価値判断は別にして、そういう歴史的事実はあったということだけは、知っておいてよろしいのではないかと思います。

さて日本ですけれども、日本だけはもちろん朝貢国でもありませんでしたし、冊封国でもありません。中華世界からは全く外にあった。もちろん大清帝国と交流はありましたけれども、普通の交易国でした。冊封も朝貢もやったことは、例外的な一時期を別にして、ありません。

それからもう一つ言っておきますと、一番右下に台湾がありますね。台湾に括弧して化外、これは中華文明の教化を受けない野蛮な僻遠の土地だという意味です。つまり台湾は中華文明圏には入っていないんですね。化外です。清国官僚も一番行きたくないところが台湾だったようですね。マラリア蚊がブンブン、毒蛇がうようよ、こんなイメージです。とにかく人間の住むところではない。あそこに住んでいるのは蛮族だというイメージですね。こういう中国人が持っているイメージも、実は現代の中台問題を考える上で、歴史的事実として知っておく必要が、私はあるんではないかと思います。

さて結論であります、つまり中華人民共和国とはいかなる存在か。私共がまず認識しておかなければならないことは、中華人民共和国が継承したのは中国史上最大の版図を築いた大清帝国であったという事実です。

ともかくも中国は日本人には想像も出来ないような茫々たる世界だということです。少なくとも言い得ることは、清国は主権国家などという観念は全くなかったということです。それ自体が一つの世界で

あって、中国語で言えば「天下」ですね。天のもとにある天下。これが全てだったと考えたのではないかと考えられます。

そもそも漢字文化圏と東南アジアにおいては、主権国家などというコンセプトは当時全くありませんでした。主権国家という観念はヨーロッパから輸入したものです。だれが輸入したかという日本です。近代主権国家システムを作ろうという目的で、敵対する列強から導入した観念です。ましてや当時の大清帝国に主権国家などというコンセプト、観念があったはずありません。逆に言えば、日本も明治維新以前には主権国家という観念はなかったと言わざると得ないのです。中国に存在していたものは、くどいようですが華夷秩序と冊封体制という観念に基づく、茫漠たる政治体制であったということです。

ところでこの茫洋たる政体を強固な政治的統合体へと変容させなければ、中国は存在を許されない、そういう時代がやってきます。これがウエスタン・インパクトでして、要するにアヘン戦争をイメージして頂ければよろしいと思います。あのまさに実にダーティーな戦争ですよ。イギリスは中国にお茶の代金としてアヘンを売り付けていたのです。それを拒否した清国に挑んで、香港島の割譲を受け、それから九龍半島を 99 年租借する。これで中国はスリーピング・ライオンだと分かって、欧米列強が次々と中国に参入して有力な沿海部の都市は全部ヨーロッパの租界になってしまったのです。これはまさに屈辱の近代の始まりです。こんなに屈辱的なことはない。世界に冠たる華夷秩序と冊封体制を持って大清帝国を自認していたのに、結果を見るといかにも脆い。

もうそんな観念で中国を運営していくことは駄目だ。むしろ敵国である列強の主権国家システムを導入して、近代化を図らなきゃ駄目だということになったのです。辛亥革命により清朝が倒れたのは 1911 年のこと、去年が辛亥革命 100 年。あるいは中華民国建国 100 年で、あちこちで催し物が行われました。孫文の辛亥革命で清王朝がひっくり返り、新たに中華民国が生まれたのは、華夷秩序と冊封体制という伝

統的な中国の王朝観念が崩壊したからであるということが出来ます。国土が無残にも蚕食されていくという手ひどい屈辱を味わわされたのです。主権国家観念を導入して堅固な統一国家にならなければ、中国はもう存在できないかもしれない、こう考える一群の政治家、官僚、知識人が中国の中から生まれてきたのです。

そうせざるを得ない更に二つの大きな出来事が、中国には起こりました。先程言いましたように、外国ではあっても中国と冊封関係を結んでいた国が朝鮮とベトナムでしたね。実はこのベトナムの領有権を巡って、清国はフランスと戦争をするんですね。清仏戦争ですが、その戦争に清国は敗れて、ベトナムは以後フランスの植民地になってしまいました。それから朝鮮はどうでしょうか。日清戦争によって日本が勝利して、そして朝鮮は自主独立の国となった訳ですね。

つまり日本が日清戦争に臨んだ日本の意図は、朝鮮という大清帝国と君臣の関係を結んでいるような国が、自分の隣にあるのならば日本の安全は常に脅かされる。朝鮮の中で戦争や内乱が起こると、すぐに清国にお願いして、巨大な規模の兵力を送ってもらう。こんな関係が続いていたのでは、日本の独立は保てないと明治の指導者は考えたのです。そこで朝鮮半島は自主独立の邦なりと、下関講和条約の第一項はそううたっています。朝鮮の清国からの分離を図って戦った戦争が、日清戦争です。ベトナムと朝鮮という清国にとって大事な朝貢国も奪われてしまったのですから、中国にとってこれが屈辱でなかったはずはない。

そこで近代的な国民国家の樹立志向という運動が起こった。その先輩国であった日本の明治維新について中国の知識人は、大変にこれをよく勉強するようになります。「戊戌(ぼじゅつ)政変」は、要するに明治維新に倣って制度改革をしていこうという運動であります。更にはヨーロッパの知識や学問を摂取して、中国を改革していこうという運動、これが洋務運動ですね。明治維新に匹敵するような運動を中国は展開しようとしたわけですね。

そして中国は辛亥革命によって中華民国という新しい国家を作ったのです。孫文が初代の総統であり、それを引き継いだのは蒋介石であったということは皆様ご承知の通りです。つまり中国は歴史上初めて主権国家の観念に目覚めたのです。歴史というものは誠に皮肉なものです。この近代主権国家樹立への覚醒が、実はその後の中国に大変重い荷物を背負わせることになるのです。

それまでは中国は主権国家などというコンセプトはなかったのです。ね。国境は砂漠や高原の中にスーッと消えていくような世界。そういう茫洋とした天下観念しかなかった。そこに一定の国境を決めて、その中に住まう人間を堅く統治しよう、そうしなければ主権国家が成立しないことになります。その為には何が必要なんでしょうか。国民を自分たちの方に向けさせる為の運動。つまり今の言葉でいえばナショナリズム。これが決定的に重要でした。主権国家を作る為には国民の政治的な凝集力が必要である。その凝集力を沸き立たせるものはナショナリズムである。そう考えた訳です。

そこで孫文は、振興中華というコンセプトを作り出します。皆さんも中国へ行かれて街を車で走ったりすると、あちらこちらにいろんなスローガンがありますけど、その中にほとんど必ずといっていいくらい赤字に金か白い字で「振興中華」という字を見出すと思います。つまりこれは孫文以来 100 年も続いているコンセプト、スローガンです。しかしこの振興中華というナショナリズムが実に皮肉なことでありますが、中国に重い荷を背負わせることになります。

振興中華といった場合の中華には五族が含まれます。もちろんさっき言ったモンゴル、チベット、ウイグルですが、それに満族と漢族、これが五族ですね。清国が倒れた時に、当然モンゴルやチベットやウイグルは中国から分離・独立していこうという運動が起こった。これは無理もないことだろうと思うのですが、そんなことされたんじゃ新しい中華民国は作れないとあって、孫文は彼らを引き留める訳ですね。その為にどういうスローガンを出したかということ「五族共和」と言っ

たんですね。つまり「五つの民族が平等な権利を持った共和体制を作る。それが中華民国だ」と言ったんです。でもそれは結局のところ嘘であったということが分かります。後の孫文の文書の中に次のようなことが書いてあります。1番目の(c)の黒丸の1を見てください。「漢族ヲ以テ中心トナシ滿蒙回藏四族全部我等ニ同化セシム」。満州族、蒙はモンゴルですね、回はウイグルです、藏はチベットです。孫文は「振興中華」「五族共和」と言いながら、その中枢に漢族を置いて、他を同化の対象と考えたということです。

中華ナショナリズムはナショナリズムです。ナショナリズムであるがゆえに主権国家内の異民族の樹立を許すはずがありません。もちろん49年に中華人民共和国ができますけども、あの共産中国においてその異民族の平等性、ましてや自立が許されるはずもない。同化の対象とならざるを得なかった。そんな次第で、中国は「大清帝国という漠然とした王朝国家から主権国家への転換を図ろう、そうしなければ中国という存在はないんだ」と考えて、ナショナリズムを発揚させた。しかし皮肉にもこれが異民族を主権国家内に封じ込めてしまうような暴力的な帝国へと変じていったとすることができる訳であります。

そこで話は現代に飛びますけど、皆さんも最近の中国の動向をジャーナリズム等でご覧になり、どんな感じを持っておられるでしょうか。僕も1970年代の終わり頃から中国と現在まで付き合いがありますがけれども、特に79年、鄧小平が改革開放とって市場経済化を始めて、それから予備的な時間が若干ありましたけども、90年代の初め頃から現代に至るまで、とんでもない高成長を続けていますね。国力が増強し、軍事力が増強し、外交世界における中国のプレゼンスも高まってきた。そして祖国がこんなに発展したということになれば、中国人自身のナショナリスティックな心情も高まってくるのは当然だろうと思いますね。

例えば我々に関係している出来事で言えば、尖閣諸島の中国漁船衝突事件に現れているように、傲慢で、挑戦的で、挑発的な中国の行動

が目立っている。あるいはオリンピックや万博、サッカーのワールドカップ等が中国で開かれても、どうしてここまでやるかという傲慢さが目に付くようになっております。屈辱の近代史を長く経てきて、なかなか発展はしなかったんだけど、鄧小平の時代になってこの30年大変な成長をした。世界で中国を見くびるような国はどこにもなくなった。そういう感覚が転じて傲慢で挑戦的で挑発的なナショナリズムになっている。実はこれは伝統中国の華夷秩序観念が再興している、100年間眠っていたこの観念が復元してきている証ではないか、私はそのように見ております。さっき見て頂いた図の2番目の方ですね。ああいうコンセプトが現代に再現してきている証ではないかと思いません。

これは例えば南シナ海等でも、そこを「核心的利益」の場だというようなことを中国の政治家は公式なステートメントで言ってるんですね。今まで中国が「核心的利益」の場だと言っていたのは、チベットとかモンゴルとかウイグルとか、あるいは台湾とか、ここは「外国がとやかく言うところじゃない、中国の核心的利益の場だ」と言っていたんです。ところがいつの間にか「南シナ海全体が、核心的利益の場だ」と言われ、公式のステートメントではないけども、「尖閣も核心的利益の場」だと中国は言い出してきています。こういう事実を見るにつけ、大清帝国の秩序の再現か、華夷秩序観念の覚醒かという感じを私は持っております。

中国という国は、エネルギーが不足している。とてもあの高成長を持続させるだけのエネルギーや自然資源を、中国の国内で充足させることはできません。世界中で利権を漁っているという報道は皆さんも耳にされているだろうと思います。ひょっとしたら中国の版図と考える地域の外縁は、今後何十年かに渡ってどんどんどんどん広がっていく可能性があります。

一つ例をあげてみます。1992年2月のことでもありますけども、この年はどういう年であったかという、天皇陛下がご訪中した年なん

です。つまり日中関係が極めて温和にスムーズに展開していたはずの時期なんですね。ところがこの1992年に領海法という法律が国内法として制定されているんです。この国内法をレジюмеに書いておきました。1992年2月領海法の第二条なんですが、これを見ますと、「中華人民共和国を取り囲んでいる海域の全ては自分の物だ」と言ってるんです。台湾はもとより、尖閣諸島は台湾に付属する島とされています。ここに書いてある釣魚島というのは、日本では尖閣諸島と言っている地域です。ちょっと読んでみましょうか。「中華人民共和国の領海は、中華人民共和国の領地領土と内海に隣接する一帯の海域とする。中華人民共和国の領地領海は、中華人民共和国の大陸とその沿海の島嶼、その後ですね台湾及びそこに含まれる、尖閣諸島ですね、釣魚島とその付属の各島、澎湖諸島、東沙諸島、西沙諸島、中沙諸島、南沙諸島及びその他一切の中華人民共和国に属する島嶼を包括する」と書いてあります。中国の子供たちは子供の時から中国の領海はここまでだと教えられて、刷り込みをされているのです。

ベトナムもインドネシアもフィリピンも弱りに弱っているということです。東南アジアの南シナ海に隣接している国を見ると、例えばベトナム、ラオス、カンボジアそれからブルネイ。今あげた四つの国は、もし南シナ海が中国の制海圏に入ったらば、外洋に出て行く海がないんです。

しかし考えるに、中国というのは大変な国ですね。天皇陛下がご訪中している一方で、こういう法律を作って、日本が主権、紛れもなくそこには領土問題がないと主張している尖閣諸島も自分のものだという法律を通してしまっているからです。しかし、そのことに我々が気付かされなかったというのは、この辺も中国の上手いやり方なのかなとも思います。要するにこういう法律は定めたけれども、この法律に沿うように自分の領海を設定していくだけの軍事力と国力はまだないから、それはまだそっと隠していこうということでもあります。そしてその実力が完成したと判断した時には、一挙にそれを自分のものにし

ようということでもあります。

(d)に中国語なんですけれども「韜光養晦(とうこうようかい)」と書いてあります。光と養を取りますと韜晦(とうかい)と読めます。韜晦という日本語はご存知かもしれませんが。「韜」が包み隠すという意味です。「晦」はくらますという意味です。ですから韜晦というのは、才能や本心を隠して人の目を眩ますといった意味です。こっそりと「軍事拡大を図ろう」、そして然るべき時が来た時には一気にこれを見せつけてやろうことです。

この「韜光養晦」戦略という戦略は、いつ生まれたかということ、1989年6月であります。この年に何が起こったかはお記憶でありましょう。北京天安門事件が起こった年です。中国の人民解放軍のあの非人道的なやり方に、世界中の人々は中国への恐怖を感じたのです。我々はあれをライブで、テレビで見ることが出来ました。あの日のことを忘れることは出来ません。これはちょうど中ソが和解して、中国共産党総書記の趙紫陽とソ連共産党書記長のゴルバチョフが和解をするということで、ゴルバチョフさんが北京にやって来る日だったんです。歴史的イベントですから、世界のジャーナリストが皆北京に集まっていた。その前で北京天安門広場に結集して座り込んでいた市民や学生を、人民解放軍の戦車がひき殺して行ったのです。このシーンを我々は見せられたのです。西側の国々が一斉に対中制裁に打って出たのは当然のこと、日本も当然のことでもあります。この時に鄧小平は、韜光養晦戦略を出したんです。光を包み養い隠す。つまりは外国に悟られずに着実に力を蓄え、然るべき時に備えよといったのです。

日清戦争に日本が勝利して、旅順や大連のある遼東半島の還付を受けた。同時に台湾も日本に割譲され、それから清国から大量の賠償金を得た事はお存知だろうと思うんですが、しかしその条約が結ばれた3日後、ロシアがドイツとフランスを巻き込んで、日本の外務省にやってきて三国干渉を始めるんですね。「遼東半島を清国に還付せよ」と3日後に言ってきたのです。日本としては日清戦争に軍事力と国力の全

てを使い果たしてありますから、つまり蕩尽(とうじん)し尽くしておりますので、ロシアがドイツ、フランスと一緒にあって連合艦隊でも組まれてきたら、日本は国が滅亡してしまう訳ですね。

そこで苦渋の選択として、この屈辱的な三国干渉を受諾するという事になったのです。その受諾した時に、どういう言葉を日本人は使ったかという、「臥薪嘗胆」ですね。つまり薪の上に臥(ふ)せて、熊の胆(い)を嘗(な)めるような努力をして次の戦いに備えようというのです。外交というのは所詮、国力と軍事力の差なんだから力を付けなければどうにもならないという訳です。私は中国の「韜光養晦」という戦略を日本の歴史的事実に徴して言えば、日清戦争後の「臥薪嘗胆」と同じようなものかなと思ったりもします。

この 2、3 年の中国を見ていると、この韜光養晦戦略を放擲(ほうてき)したように思われます。つまり自分が領海法で定めた版図を、実際に手に出来るだけの軍事力と国力を手にしたから、別にもう包み隠す必要はないんだ。そう考えたのが近年のことではないかと思えます。沖縄本島と宮古島に挟まれた海域が宮古海峡ですけども、この宮古海峡は中国の艦隊の公然たる航路になっております。4 隻の艦船が、或いは 6 隻の艦船が、或いは 10 隻の艦船がここを出て行って、沖ノ鳥島周辺で軍事演習を行って、そしてまた戻ってきて、また宮古海峡を通過して中国の軍港に戻る。こんなことは年間に何度も起こっている訳ですね。毎年『防衛白書』が出ておりますので、それを見れば中国が何月何日にそういう行動をやったかということが書かれております。我々が考えるよりも遥かに高い頻度で、そういうことをやっております。

つまり韜光養晦戦略も放棄してしまった訳ですから、日本人の神経を逆撫でしても別に構わないじゃないかとそういう感覚なのだろうと思えます。先程も言いましたように、困っているのは日本だけではなくて、東南アジアの多くの国がそのような状態になっているのです。フィリピン、インドネシア、もちろんベトナム等、やはり米国の関与が薄くなっていけば、中国にますます強い圧力を加えられる可能性が

大きい訳ですけれども、だんだん鬱屈は強まっていくのではないでしょうかね。

フィンランドイゼーションという言葉があります。フィンランド化。ソ連のもとにあったフィンランドのように独立国であっても、ソ連の意図に逆らうということは絶対に出来ない。ある種の保護国化されてしまったような状態が、下手をすると東南アジアでやってきかねないですね。相手の意に逆らえない時には、相手の意に沿うような行動をする。フィンランド化現象というのはそういうものだと私は勝手に解釈しておりますけれども、そういう現実がやってくるのではないかと思います。

さて時間もだんだん迫って参りました。ここまで、もしご理解頂いたのであれば、あとは私の考え方を述べることはそう難しいことではございません。2番目のキーワード。「中国は後れてやってきた帝国主義国家である」です。

尖閣諸島の中国漁船衝突事件を一つ皆さん思い出してください。これは一昨年の9月に起こった出来事ですが、あれを思い出して頂ければよろしいのではないかと私は思います。あの時新聞の社説は、全国紙5紙何れも「この中国の行動は理不尽だ」と書いたんです。「理不尽だ」などと表現するのであれば、そう表現した方が敗北だと私は思います。むしろ興隆期の帝国があのような挙に出ることは当然のことだと考えて、国の守りに備えるというのでなければ話にならないと、私はその時そう思いました。相手の行動に理がないというのであれば、こっちで戦略を立てようもないじゃないでしょうか。

その出来事が起こってしばらく経った時、私はある新聞にあるエッセイを寄せましたら、「渡辺さん上手いこと書いたね」って久しぶりに褒められたことがあります。私は中国漁船衝突事件を見ていて、「まるで自分の古い自画像を見ているようだ」と書いたのです。どういうことかということ、自分だってそういうことを過去にやったじゃないか。それなのに今の中国だけがそういうことをやらないなどという理屈が

あろうはずがない。自分だって他国の領土を侵略し、領土を拡大しようという衝動に身を焼かれた時代があったんじゃないか。中国だけがそういうことをしないとなぜ言えようかということです。日本が韓国を保護国化し、最後に韓国併合したことは事実です。鴨緑江(おうりょくこう)を越えた向こうで満州国を建国したことも事実です。台湾を領有したことも事実です。日本もまさに日本の本土四島に比べれば、その何十倍かの領土を自分のものとしたという歴史がある訳ですね。つまり日本が膨張主義を採った時代があったのです。そういう衝動に国民が身を焼かれた時代があったじゃないですかという意味です。「古い自画像を見ているようだ」。

ドイツを見て、どういうことが言えるでしょうか。19世紀の後半期にビスマルクによるドイツ統一がなりました。それを引き継いだのが皇帝ウィルヘルムⅡ世ですけども、彼の治世下においてドイツ帝国は膨張主義の衝動をますます強めます。中欧に生まれたドイツ帝国の膨張主義。これが結局、第一次大戦や第二次大戦の遠因になっていったということは誰もが知っている事実ですよ。

アメリカはどうでしょうか。アメリカは東部13州に世界から移民がやって来て建国をして、中部から西部、カリフォルニアまで西部開拓をやってきた国ですね。カリフォルニアの開発が終わって、アメリカは西部開発を止めたかというとなんかそんなことはないですね。海の向こうに西部があると彼らは考えたのです。もう一度カリブ海へ戻って、キューバ、プエルトリコを自国領にする。それからコロンビア領のパナマ運河の永久航行権を手にして、そして太平洋に出て行ってハワイとグアムを統合しました。そして大兵力を投入して、フィリピンで米西戦争を起こして、フィリピンを自分の植民地化し、更にその後、機会均等・門戸開放をスローガンにして、中国大陸を狙ったのは、アメリカじゃないですか。

日本もドイツもアメリカも対外膨張をやったという歴然たる事実がある訳です。一国が興隆期を迎えた時には、必ずやそういう膨張主義

の時代がある。なぜ中国だけにはないと言えるのだろうか。中国の行動が理不尽だと言えるのだろうか。理不尽などではない。自分の歴史を振り返ってみれば、中国の行動には理がある。その理を伶俐にこちらが捉えて戦略を立てなければ、どうにもならないのではないか。日本の有力 5 紙がいずれも「中国の行動は理不尽だ」では話にならない。そういうことを、私は言ったのであります。

ロシアも、ごく簡単に止めますが、他民族国家であり王朝の歴史を長らく擁してきた。民主主義という伝統はまるで持っていない。専制主義の歴史しかない。そのロシアが南下政策を始めて、それに抗する日本との間での日露戦争があったのです。ガス、何よりも石油、それから希少資源をたくさん持っている極東・シベリア、それを武器にしてプーチン第二代の辺りにだんだん専制主義へ回帰して、南下政策をロシアが再開しないと誰が言えようかと思うのです。

私は 3 年くらい前に文春新書で、福沢諭吉の『脱亜論』をなぞるような『新脱亜論』という本を書いたことがあるのですが、その仮説は、現代の日本を取り巻く極東アジアの地政学的な構図は、開国維新から日清・日露戦争までの、あの緊迫した状況に先祖返りしているほど酷似しているというものでした。私の独自の近現代史の解釈であったのですが、私は中国やロシアの行動を見ていると私の仮説は、より説得力を持ってきたんじゃないかなと感じている次第です。

今私は一国の歴史的な発展のある過程においては、膨張主義の時代が必ずある。しかし膨張は一方的な膨張ではなくて、当然その膨張を押し止める力もある。膨張ベクトルがあれば反膨張ベクトルもある。そのせめぎ合いの中で、現実のベクトルが決定する。そう考えるべきだろうと思うんですね。なるほどドイツの膨張に対して反膨張主義を取ったのはイギリスです。日本の膨張に対してこれをブロックしたのはアメリカです。ですから中国の膨張に対しても、然るべきタイミングでもって中国の反膨張ベクトルを、どこかで働かせなければならないのではないかと思います。

ドイツの膨張に対して反膨張ベクトルをタイミングよく発することが出来なかった屈辱の事例が、実はミュンヘン会談です。これはどういう会談であったかというのと、1938年のことですがけれども、ヒトラーが大変な対外膨張主義を始めていました。そして当時のチェコスロバキアの一地域にズデーテンという地方がありまして、ここはドイツ人が非常に密度濃く住んでいました。そこをヒトラーは併合しようと狙ったのです。そうはさせられないと考えて、イギリスの首相のチェンバレンがミュンヘンに来てヒトラーと会談をしました。そして何日か会談をしたようでありましてけれども、その結論は、こうなのです。「このズデーテン地方をヒトラーにくれてやれば、ヒトラーの膨張欲求はそれによって満たされドイツは静かになるであろう」とチェンバレンは判断したらしいんです。そしてチェコスロバキア政府に対して「ズデーテン地方をヒトラーにやれ」と勧告して、現実になんてなったというのであります。

ところがこれが大失敗であったことは、後の歴史が示したごとくであります。これによって実は、ヒトラーの膨張欲求はますます大きくなっていったのです。あの第二次世界大戦という大変な悲劇に至る分水嶺の位置したものが、ミュンヘン会談です。私はひょっとして日中関係において、一昨年9月に起こった尖閣諸島漁船衝突事件は、日中間におけるミュンヘン会談じゃなかったかなと考えているんですけども、皆様どうお考えでありませうか。

それにつきましても、あの時の日本の主導部の反応というのは、一体あれは何だったのかと思わざるを得ません。領海に侵入した中国漁船、あれは漁船じゃないでしょうね、漁船を偽装した小さな艦船だと思えますけれども、捕まえる。捕まえたんですけれども、船と14人の船員さんをすぐに釈放してしまう。船長さんだけは、さすがに捕まえた訳です。捕まえて尚かつ調査を続ける為に、身柄拘留期間の延長までやったんです。しかし船長さんを捕まえたと同時に、中国は強行な抗議を日本に出しました。船長さんの身柄拘留が決まると同時に、

ニューヨークを訪問していた温家宝首相が「すぐに船長を釈放しないと一層強硬な措置をとる」と言ったのです。事実すぐその後でレアアースの事実上の輸出の禁止があり、保定という北京からちょっと北にある街ですけども、そこに行っていたフジタの社員 4 人を拘束するというのをやった訳ですよね。それから成都だったと思いますが、イトーヨーカドーに官製デモが万単位で押し寄せるということもやりました。その上で中国側が日本側に漁船衝突事件に対して謝罪と賠償を要求してきているのですよ。全く事態は逆です。

ところがこれに対して結局、日本は何も出来ず、ついに船長さんを釈放してしまったのです。明々白々たる主権侵犯という犯罪に、日本は一切の法的措置を取ることが出来なかったのです。これはミュンヘン会談ではなかったのではないのでしょうか。日本は押せば引く、押せば法的な手続きに入ることも止める国だ、という学習効果を中国にさせてしまったのです。私は尖閣の命運が尽きる日は、そう遠くなくやってくるのではないかとさえ思います。

同年の 9 月には、確かハノイで菅直人さんと温家宝さんがトップ会談をやるはずだったんですけども、中国側によってキャンセルされてしまいました。それから同じ年の 10 月には横浜で APEC というアジア太平洋協力会議が開かれたんですけども、その時胡錦濤さんと菅直人が会うことになっていました。廊下で通訳を入れて十数分の会談だったらしいのですが、目を下に向けて遺憾の意を表明したらしいですけども、その程度で終わってしまった訳ですね。誠に残念なことです。まだ私はチャンスはあると思っていました。

小沢一郎さんの事件でもそうなんですけど、例の検察審査会制度がありますよね。那覇地検の検察審査会で無作為に選ばれた 9 人の検察審査官が「この出来事は起訴相当だ」と言ったんです。そしたら地検側は「不起訴相当だ」と。もう 1 回地検審査会が開かれて「起訴相当」と言った。検察審査会が 2 回続けて起訴相当と言えば強制起訴になる。小沢さんの出来事もそうでありますけれどもこれも同じです。しかし

日本は強制起訴はしなかったです。もちろん犯罪人を交換する為の条約なんかありませんから、そんなこと言たって中国側が船長さんをこっちへ差し向けてくれることは、まずないとは分り切っていることですけれども、しかし外交的な抗議というものは厳然とやらなければ国家とは言えないと私は思いますね。そういうことをやらないで尖閣諸島が自分の主権の及ぶ範囲である。つまり尖閣諸島には日本の主権問題は存在しないなんていう主張は自己矛盾ではないかという感じさえします。

日本はミュンヘン会談を中国との間でやってしまった。そういう自己認識、事実認識が重要だと思うんです。私自身の考え方を問われれば、集団的自衛権の行使は容認すべきだと考えておりますし、日米同盟はやはり片務的なものであって、もっと双務的なものにしなければならないとも思います。非核三原則なんて嘘に決まっているような原則を立てて平然としているような対応は、やっぱり直すべきだと思います。何よりも憲法第九条とそれを支える憲法の前文というのは、書きかえなければならぬ。私自身はそう思っております。しかし今はそんなことはあえて大きな声で話そうとは思いません。さっき言ったような事実に対する自己認識と事実認識がなければこんなこと出来っこないと思うからです。

最後に一言、我々はどう考えようと中国を変えるなんてことは絶対に出来ません。アメリカを変えるなんてことは絶対に出来ない。日本人が変えることが出来るのは日本だけだというメッセージです。このことをどうしても言いたいのであります。今私が言ったことは、日本人が決意すれば出来ることです。これを「中国の行動が理不尽だ」などと言う訳の分らない言葉でごまかしているのが現代の政府であり、日本人なのではないかと思うのです。

大体話したいことは終わったように思います。ご静聴ありがとうございました。

時：2012・03・15

於：岐阜グランドホテル

拓殖大学総長・学長 渡辺利夫

迷走する日本外交ー中国とどう向き合うか

I 中華人民共和国は大清帝国の後裔である

(a) 伝統中国の国際秩序観念

元→明→清→北伐・国共内戦→中華人民共和国 伝統中国の国際秩序観念（図1、図2）「華夷秩序・朝貢・冊封体制」「征服王朝」としての大清帝国 清王朝の「中華帝国」化 儒学・漢字・科挙制度の導入 「華夷秩序」観念の希薄化

(b) 主権国家観念の導入を図る中国

アヘン戦争と「西洋の衝撃」 辛亥革命 清仏戦争・日清戦争での敗北「華夷秩序・朝貢・冊封体制」の崩壊 主権国家樹立への希求 戊戌 政変・洋務運動

(c) 「中華振興」と五族共和

- 「漢族ヲ以テ中心トナシ満蒙回藏四族全部我等ニ同化セシム」
(孫文)
- 1992年2月領海法「中華人民共和国の領海は中華人民共和国の領地領土と内海に隣接する一帯の海域とする。中華人民共和国の領地領海は中華人民共和国の大陸とその沿海の島嶼、台湾及びそこに含まれる釣魚島とその付属の各島、澎湖列島、東沙群島、西沙群島、中沙群島、南沙群島及びその他一切の中華人民共和国に属する島嶼を包括する」

(d) 「韜光養晦」

伝統的王朝「遺伝子」の覚醒 “外国に悟られずに着実に力を蓄え然るべき時に備えよ” 中国版の「臥薪嘗胆」 韜光養晦戦略の放擲

II 中華人民共和国は後れてやってきた帝国主義国家である

(a) 新帝国主義としての中国 中国の帝国主義は我々の古い「自画像」である ドイツ・日本・米国の過去を見据えよ

(b) 尖閣諸島衝突事件、ミュンヘン会談だったのか
膨張ベクトル vs 反膨張ベクトル

(c) 中国経済の課題

(d) 事実認識と自己認識

(以上)

図1 伝統中国の国際秩序観念図

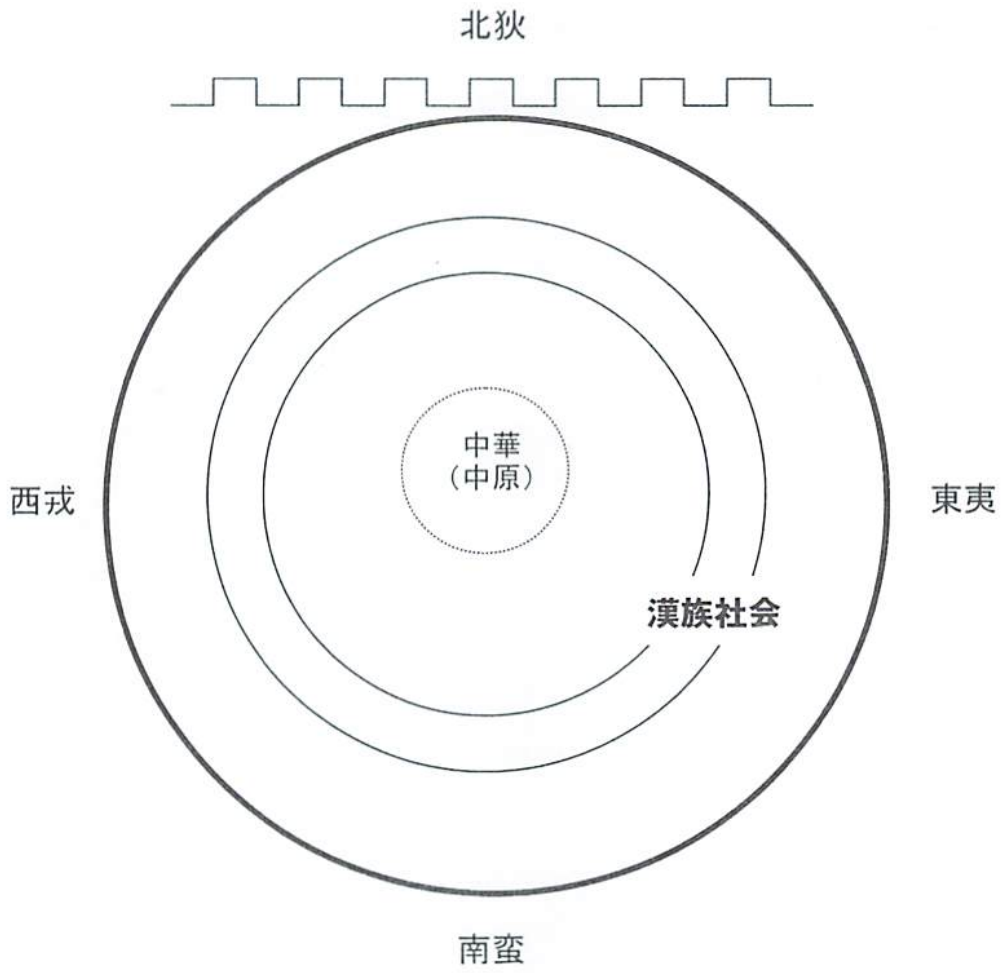


図2 大清帝国の国際秩序観念図

